特 集

日本風工学会 40 周年記念

日本風工学会 40 周年を迎えて

Preface to the 40th Anniversary of Japan Association for Wind Engineering

藤井邦雄*

Kunio FUJII

本学会の40周年を会員の皆様と共に迎えることが出来、心からうれしく思います。

私が建設会社の研究所で風の研究に初めて接したのは1970年ごろで、社会人となってから間もない時期でした。なにも専門的知識がない状態からのスタートでしたが、幸い、風工学の発展時期と重なり、多くのことを学ばせていただきました。

また、この間、本学会が研究会の頃から今日に至るまでの経緯を目の辺りにみさせていただきました。白石会長時代、村上市長時代の通算8年間学会の理事を勤めさせていただきましたが、この間、最も気になっていたことは会員数の増減でした。今でもほぼ500名近い会員数を維持していることは、風工学に対する社会の要望に会員の皆様が応えてきた成果と努力の賜物であり、小規模であっても確実に存在感は増していると思います。

最近、大学や民間の研究機関での研究者の世代交代や年齢層の偏りを痛切に感じておりますが、研究発表会での活発な質疑や、懇親会などで風工学を牽引しておられる先生達と若い人との和やかな交流の中に本学会の今後の発展を予感でき、うれしく思っております。

40年間の大半は経済成長期に符合して、風工学への社会的要望が多かったと思いますが、最近では新エネルギーや環境改善、風災害の軽減などの分野で新たなテーマも続出しており、今後、本学会がますます充実した社会貢献を果たし、若い研究者を惹きつけていくことを期

待しております。

以下、勝手な私見ですが、若い人への期待を述べさせていただきます。

40年前と違って今は、風工学も気象分野との交流も進み、竜巻などの被害調査、加えて風洞実験やCFDを利用した研究事例も増えてきました。

若い人が新たな研究テーマに取り組むには、自分の所属する分野だけでなく、より幅広い分野の文献を調査し、新たな実験技術や、高度なCFDの解析技術をスタート時点から学ばなければならない状況と思います。参考になるものがないというよりも、多すぎて最初から重たい負荷がかかっていると言えるかもしれません。

しかし、周りにはこれまで風工学を支えてきた素晴らしい先輩たちがおられるので、叱咤激励を受ける中で頑張ってもらいたいと思います。また、ペーパーの世界だけでなく、なによりも問題となる現象が起きている現場を体験してもらえればとも思います。是非ともこのようなことも踏まえて、新たな問題提起をして、学会の研究活動を活活化していただきたいと思います。

40年後の本学会がどのようになっているかは実際に見ることは出来ませんが、想像するだけでも楽しみです。

* 株式会社風環境リサーチ 代表取締役
President, Environmental Wind Research Inc.

日本風工学会 名誉会員
Honorary Member, JAWE